



「福澤育林友の会」ニュース

第7号 発行日 2004年12月24日

東京都港区三田2-15-45

慶應義塾管財部

福澤育林友の会

TEL 03-5427-1532

FAX 03-5427-1533

<http://www.f-ikurin.jp>

志津川研修旅行と地球環境問題

慶應義塾大学商学部長 桜本 光

より豊かな生活の実現と地球環境保全の両立が、21世紀急務の課題の一つになっております。国境を越えた酸性雨や温暖化ガスなどの地球環境問題は、年々深刻さを増しています。たとえば、温暖化の原因の一つである原油などの化石燃料の使用によって発生している二酸化炭素ガスの排出量は、年々増加の一途をたどっております。異常気象等昨今危惧される問題です。しかし、この問題解決の学問的整理は、ブエノスアイレス会議、京都会議等の国際会議を経て明確になってきました。たとえば、二酸化炭素ガスを例にすると、一つは、二酸化炭素ガス排出量を増やさずに安全かつ効率的にエネルギーを得るための方法が提案され実現にむかっています。この方法は脱石油戦略と呼ばれ、水素燃料や燃料電池によって「水素社会」の実現を目指しております。もうひとつの方法は、人類を含めた動物の二酸化炭素ガス排出量に見合う二酸化炭素ガス吸収メカニズムを持続的に構築することです。志津川町での塾の植林活動などの積極的な植林事業の推進や開発途上国を中心とした非木材紙の普及促進による森林保護により、植物による二酸化炭素ガス吸収メカニズムを継続的に構築することが重要であると考えられています。

慶應義塾は、今回研修旅行にいった宮城県志津川町(約65ha)をはじめ、修善寺の幼稚舎の森、三重県志木の森・尾鷲の森、和歌山県清水の森、岡山県落合の森、来年訪問予定の石川県尾口の森等、全国160ヘクタール(東京ドームの36倍)もの森林を維持しております。自然の大切さ、環境保全の大切さを、一貫校をはじめ、一部の大学生によるボランティア活動の一環としての研修旅行を通じて、学習しております。また、慶應義塾の中国環境研究の一環として、砂漠化の中心で、貧困地でもある遼寧省瀋陽市康平県で、約400ヘクタールの植林を行っております。瀋陽市には、毎年のように学部横断的に塾生が訪問し、環境活動を行っております。その主な目的は、日中共同研究でなされた康平県での植林実地調査や様々な環境学習、瀋陽農業大学・瀋陽師範大学との交流、専門書で学んだ知識を実際に目で確かめる「実学」教育などです。今回の畠山重篤氏による「森は海の恋人」等の講演などを通じた植林活動の重要性や、様々な視点から環境問題について活発な議論を現地で行っております。これら内外の植林活動を通じて、さらに活発な環境活動へとつながり、研究室や学部を超え、慶應義塾のすべての塾生が地球環境問題について考えるきっかけとなることを目的にしております。

塾員である登米町の海老名さんの木の香りがする山荘や志津川町佐藤さんの荒島での「魚つき保安林」の体験から、日本国内では、治山・治水の目的で植林がはじまったが、それ以前でも森の保全と海の保全が結びついてきた等、能舞台見学中も、環境教育の必要性や、それぞれの人生観なども語られ、海瀬御夫妻をはじめ同級生や塾員・職員の温かさにふれ、4年前の鳥居前塾長との育林体験の訪問とともに思いで深い旅行となった。感謝！ 感謝！ の旅でありました。



志津川研修旅行と
地球環境問題
慶應義塾大学
商学部長
桜本 光

P1

志津川研修旅行記
(財) 福澤記念育林会
海瀬亀太郎

P2

～
P3

冬に咲く花
慶應義塾大学
経済学部助教授
福山欣司

P4



東北新幹線 くりこま高原駅に集合した参加者50名は、今回の研修旅行でお世話になる地元在住の会員、佐藤久一郎さんと海老名和夫さんのお出迎えを受け、「ホテル観洋」のマイクロバス2台に分乗し北上河畔の豊かな穀倉地帯を通り抜け、宮城の明治村「登米町」に向かいました。

登米町は北上川の水運を生かした交通の要所として明治時代まで栄え、その頃の街並みが化石の如く現在まで残っており、今はその遺産を生かして観光に力を入れている町です。



登米町に到着後、海老喜商店の「蔵の資料館」を見学させて頂きました。ここには昔使われていた大きな杉樽や醸造に使われた道具など天保4年(1833年)に創業された海老喜商店の歴史を語る道具類が展示されており、興味深く拝見しました。またここで造られた醤油の味見をさせて頂きましたが、良い香りがし急に空腹を感じました。見学後、蔵を改築した食堂で自家製のお味噌を使ったお味噌汁と共に、天然素材を上手に活かした美味しいお弁当を頂きました。

食後、地元の木材で建てられた海老名さんの素敵なお山荘をご案内頂きました。山荘は見晴らしの良い小高い丘の上にあり、眼下には北上川も見えて、眺めていると、豊かな気分になってしまう様な素晴らしい雰囲気をもった山荘でした。また庭には弓道場も併設されており、学生時代から引続き弓を愛するお人柄を垣間見た気分になりました。



続いて町の伝統芸能伝承館「森舞台」と称されている能舞台を見学いたしました。この施設は自然の風景と見事に調和し、正面奥の鏡板には塾員で日本画家の千住博氏製作の老松と若竹が色鮮やかに描かれており、また音響効果を高める為に設置された床下の甕も見え、登米町の文化レベルの高さを垣間見た気分で興味深く見学をさせて頂きました。次の機会には森と文化が融合した素晴らしい舞台で、能を観賞したいと思います。

登米の街では、木造建築の旧尋常小学校「教育資料館」や鈴木家の武家屋敷・旧登米県庁舎など、かつて栄えた登米の栄華に想いを馳せながら散策を楽しみました。

教育資料館は洋風2階建ての木造建築で、床板も5cm程ある厚板を使った頑丈な造りとなっており、当時の面影が良く残っている素晴らしい建築物でした。

武家屋敷の主は紀伊の国(今の和歌山県)熊野の鈴木家から分かれた一族との事で、私と同郷でもあり親しみを感じながら見学をさせて頂きました。この武家屋敷は萱葺き屋根でしたが、北上川には当時は萱が繁茂していたのであろうと分けも判らずに何となく納得してしまいました。(ここはスレートの産地で、円く整形した天然のスレート葺きの家が多い)

又 海老喜商店さんで製造している醤油も紀伊の国湯浅が発祥の地で、鈴木家とともに和歌山に関係する遺産がこの地に残っているのは驚きでした。



いつまでも飽きることの無い宮城の明治村での散策も終わり、後ろ髪を引かれる思いで登米町を後に、木製品などを販売している「もくもくハウス」に立寄りました。ここでは登米の杉を加工した食器・家具・玩具などの木製品や地元産のお米や野菜を販売していました。東京では台風の影響で高騰している野菜類がここでは安いとの事で、参加された主婦の皆様は大根などを宅急便で送ったりと大わらわでした。他人事ながら明日からは旦那様は毎日大根攻めに遭うのではと一寸ばかり可哀相な想いがしました。

すっかり夜の帳が下りる中、今夜の宿「ホテル観洋」に到着、今回の研修旅行の目玉として期待が集まる畠山重篤氏による講演をお聞きました。畠山氏は「森は海の恋人」とのキャッチフレーズを掲げて自然保護活動に取り組まれている牡蠣養殖家で、講演では豊かな漁場はフィヨルド湾に流入する河川流域の森林の役割が如何に大切かを判り易くお話をされました。また同時にこれからの時代は学問の領域も林学・海洋学・経済学・法学・文学と断片的に学ぶだけではなく、その学問の境界を越えて学ぶ必要があると強調され、これは正しく慶應義塾が日本の大学教育の先駆者となり進めている改革と通じる考えであり大いに共感が持てました。



講演をお聴きした後、志津川山林の管理でお世話になっている森林組合長さんや志津川町長さんをお招きし懇親会に移り、会員同士が旧交を温めあったり初めて参加された方々と知り合ったりと懇親を深めつつ秋の夜長を楽しく過ごしました。

今回の旅には田中俊郎理事長や桜本光商学部長も奥様同伴で参加されており、家族ぐるみの交流が図れて意義ある研修旅行となりました、又慶應女子高の教員も初めて参加され育林会の活動が今後一層の広がりを持てるのではと期待が膨らむ懇親会となりました。

翌朝は天気予報通り雨天となってしまいましたが、予定通り(財)福澤記念育林会の志津川山林に出発し雨の中、財団設立30周年を記念して植樹した杉林で枝払いを体験しました。

作業前と比較すると見違える様になる杉木立の姿に感動し、参加された方々は必ず濡れになりながらも集合時間を過ぎるまで夢中で作業に取り組まれていたのが強く印象に残りました。

作業の後は雨天のために集会場でお昼ご飯を頂きました。地元の主婦の方々が自宅で採れた香りの良い野菜をふんだんに使い調理してくださった豚汁とお握りがとても美味でした。た。雨に濡れ冷えた身体が温まると共に、地元の方々の好意に心も温まり、心身ともに暖まった昼食でした。



昼食後は佐藤さんが所有する志津川湾に浮かぶ小島「荒島」をご案内頂きました。

ここは海流の影響で本来は亜熱帯地方に多く見られる「タブの木」が自生している島で、魚つき保安林(漁業資源を守る為に法律で保護が義務付けられている森林)に指定される以前から地元の人々は神の宿る島として伐採を禁じており、その為に植生も豊かな貴重な天然林が残り興味深く観察させて頂きました。

荒島を後にして樹齢800年を越すとされている太郎坊の杉を見せて頂きました。樹皮は相当痛んでいるものの、未だ樹勢は衰えておらず成長を続けているとの事で杉の生命力の強さに心を打たれました。恐らく北のこの地にありながら海の暖流のもたらす海霧が適度な湿度をこの杉にもたらしている事が良いのかと「海は杉の恋人」などと畠山氏のキャッチフレーズを拝借し一人微笑んでいました。

これで全ての見学行程は終わり後は志津川湾特産の魚介類をお土産に買い求めるために魚屋さんに立ち寄りました。魚卵(イクラ)でお腹がはち切れんばかりの鮭や貝類、ウニなど都内ではお目にかかれない新鮮品が多く、主婦の皆様はニコニコしながら楽しくお買い物をして帰途に着きました。

皆様方の心の温かさに触れることが出来た素晴らしい旅でした。



今後の予定

2005 年度計画の詳細は現在検討中ですが、

- ① 第4回トークショーを慶應義塾三田キャンパスで開催
- ② 研修旅行は石川県尾口村の山林から白山スーパー林道を経由して世界遺産にも登録されている岐阜県の白川郷を訪れる計画を立てています。

詳細が決まり次第ご案内を致しますので、多くの皆様方のご参加を賜りたくお願いいたします。

冬に咲く花

福山欣司 (慶應義塾大学経済学部助教授)



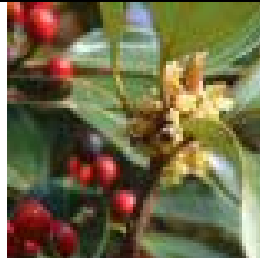
日吉キャンパスでは、毎月 1 回土曜日に自然観察会が開かれている。春から夏にかけては、それこそ花咲き乱れ虫飛び交い、という表現が相応しいほど日吉の森は生き物で満ちあふれ、観察する物に事欠くことはない。しかし、冬が近づくに連れて虫や花は急速に減り、次第に観察するものを探す苦労が増してくる。そんな中、この時期に花を咲かせ、観察会の手助けをしてくれるありがたい植物がある。シロダモとヤツデである。

シロダモは、クスノキ科の亜高木で、名前は葉の裏が白いことに由来する。本来は関東よりも南の地方に良く見られる樹木であるが、温暖化の影響か、最近、関東でも急速に増えつつあるという。日吉の森でも下草刈りの行われない場所では林床を埋め尽くすほどに密生している。普段はあまり目立たないので、気にも掛けずに素通りするが、花を咲かせるこの時期の観察会では主役となる。シロダモは雌雄異株である。雄の木には淡黄色の小さな花(小花)が何十個も集まった花序が枝に幾つも付く。目立つ花びらはないが、小花から四方に突き出た雄しべは遠目からは柔らかな綿毛のように見え、ふんわりとした印象を与えるのに役立っている。雌の花は雄しべがないので地味である。しかし、雌の木を探すのは難しくない。むしろ、雄の木よりも簡単かも知れない。というのもこの時期、雌の木には赤い実がなるからである。多くの植物では花と果実の時期は異なるが、シロダモは1年掛けて実を育てるため、花期と果実期がほぼ同じになる。赤い実の付いた枝先にさらに小さな花を付ける様は、絶え間ない生命の流れを感じさせる。

もう一つの冬咲く花の代表であるヤツデは、シロダモよりさらに遅い時期に咲く。日吉の森での花期は 11 月～12 月である。ヤツデは海辺の山林に自生する低木であるが、自然木と言うより庭木としてのイメージが強い。それは邪鬼の侵入を防ぐ呪力を持つ植物として昔から庭木として植えられてきたからであろう。雑木林の林床や林縁でよく見かけるが、これらのヤツデは庭木から由来するものも少ないだろうと思われる。

日吉の森にもたくさんのヤツデが生えている。ヤツデの花はシロダモよりも目立つので、咲いていれば気付かないで通り過ぎることはまず無い。ただし、立ち止まって鑑賞したいかと言えば、異論も多だろう。その花は美しいと言うより異様ですらある。大きな葉の上に伸びた花序は真っ白で時に 1mを超えることもある。円錐状に広がった花序の先端には2、3cmほどの、まるで線香花火のような無数に突き出た小花が付いている。目立つ理由はその形状とともに花序全体が真っ白であることに起因するのだろう。薄暗い林道で白く浮かび上がるヤツデの花は、呪力を持つ植物として遜色ない。

この時期に咲いてくれることは観察する側にはありがたいが、植物にとっては受粉という課題を抱えることになる。風媒花でないシロダモやヤツデは、誰かに花粉を運んで貰う必要がある。蝶も蜂もほとんどいなくなってしまったこの時期にいったい誰がその仕事を担うのか。ヤツデの前でしばらく待つと、次から次へとハエが飛んできて、花の上を歩き回っている。あまり良い表現ではないが、まさにハエが集っているのである。やや興ざめではあるが、冬に咲く貴重さに免じて目を瞑ることにしよう。

				
シロダモの葉	シロダモの雄花	シロダモの雌花	実と花が同時	シロダモの果実
				
ヤツデの葉	ヤツデの花	ハエが受粉	ヤツデの果実	果実の拡大